

『ことばという空間』

講師：石丸美奈子（コピーライター）

コメンテーター：江川直樹（関西大学工学部教授） 記録：宮川武（都市問題経営研究所）

石丸美奈子です。自己紹介が苦手なので、ビデオで自己紹介したいと思います。

～

女の一生バレンタイン

百年目のニュータウン

北九州市を拠点にする石丸さんは、独自の視点や感性をふるさとのまちづくりに活かそうと活動しています。

およそ 20 年前にコピーライターとしてのキャリアをスタート。これまで地元大手スーパーの CM など、多くの作品を手がけて来ました。

（石丸）「商品の本質をつかむ仕事、お客様にどういったことをアピールするか、何であるかを一言で表す仕事、...。」

自らの感性を北九州市のまちづくりに活かそうと、住宅地や公共施設の仕事も意欲的に手がけてくれました。

北九州生まれの北九州育ち、コピーライターになってからも常に地元を拠点に活動されてきました。

（石丸）「ここは他にはない絶対唯一のまちで、ある種の捉え方がある、私の原点みたいなところ、まちを歩けば、...。」

作品には北九州を紹介したものが数多くあります。

人生に劇場がやってきた

もしもふるさとがほしいなら

それぞれの門司港レトロと海峡の町

エンジョイモノレール

大里地区再開発

ふるさとを愛するコピーライター石丸美奈子。

～

これは、私のプロモーションビデオになっていますが、福岡全県にオン・エアされました。視聴率も 11.7% ぐらい取って、歴代 1 位タイだったそうです。公共の電波を使ってこんなに宣伝してもらっていいのかなと思います。作ってもらったおかげで、こういう風にいろんなところでお話するときに、自己紹介代わりに使わせていただいています。

大阪とのご縁について、ご紹介します。

北九州市は、私の故郷なんです。20 年前ぐらいに市長が代わりました。その方は、国交省から来られた末吉さんという人で、フライングメイヤーという人で、国から予算を引っ張って来て、いろいろなものを作った人なんです。この方が新しく市長になる時に、選挙公約として民間から女性のシンク

クを募りますということで、それで私はコピーライターとして駆け出しのころだったので、論文や面接の試験があって、そのメンバーの中の 21 人に入りました。そのときの面接官が坂本春生さんという人で、通産省から第一勧業銀行に行って、西武の副社長になって、この前愛知万博をやられた人です。この方とはいまだに親交があって、私の目標とする女性なんですけれども、たぶん彼女が、変な子がいるけれども、入れておこうと思われて、入れてもらったんだと思います。

そのメンバーに入ったことで、北九州のごく一部で生活をしていたのですが、まちづくりのシンクタンクですから、初めてオール北九州で、5 市対等合併をしている市で、独特のまちで、北九州工業地帯とか、最近では公害を克服した環境首都宣言というのもやっていますし、門司港レトロとか多少有名かもしれませんが、新日鉄の城下町とか言われてます。オール北九州ということで、門司から若松までの勉強をする機会を得ました。その中のメンバーの中で私が一番歳が若かったものですから、行政も使いやすかったらしく、2 年間勉強した後も、様々な北九州市の行政の委員会、審議会に引っ張られることが多かったです。

その中の一つに、旦過市場の再生プロジェクトの委員会もあって、旦過市場というのは京都の錦市場ほど伝統的とか素敵ではなくて、美しくはなく、猥雑極まりない、バラックが建って、それこそ、違法建築だらけの市場なんです。非常に魅力的な市場です。川に半分建物が突き出しているようなところで、押し合いへし合いして、トタン屋根です。実際にぼやが出て危ない目にもあっているのですが、非常に活気がある。お野菜、お魚、お肉、鯨肉専門店のお店があったり、迷路のようになっていて、アジアの不思議な空間です。そういう市場を何とかしなければいけない、違法建築だしね、ということで、その再生プロジェクトの委員会に入ることになりました。

そこで、座長にお見えになったのが阪大の鳴海先生です。何回かの委員会があって私は隅っこでたぶん何らかの発言をしたと思うのですが、先生がそのままじゃいかんとたぶん思われたのか、この人は何も勉強しないででたらめを発言していると思われたのか、その委員会が終わった後も何かとまちづくりのこととかでこういう方法がありますという風なことを、個人的通信教育のような形で送ってくださる

ようになりました。それに関して私は、しこしこと感想文を書いて送り返すようになったわけです。それで年に1回ぐらい、シンポジウムのパネラーに呼んでくださったり、JUDIのフォーラムに勉強にいらっしやいということで、年に1回定期的に大阪に来るようになりました。

そして、そこで江川さんと運命的な出会いがありました。その年は、阪神淡路大震災の年で、「震災に見る市民参加の都市環境デザイン」というようなファームがあったときに伺いました。そのとき、江川さんの案内で公共交通機関と自分の足で歩いて回りました。夜お酒を飲むころにはすっかり意気投合し、それからのご縁で15年ぐらいだと思います。そのときに書いたのがお手元の「神戸神話 - フォーラムの周辺で」という文章です。これはファームの中で学んだことを、本来は書かなければならなかったのですが、専門的なことはわからないので、ファーム以外のところで1日歩いたことを書いています。芦屋に行って、そこに行ったのが非常に印象的だったので書いてありますね。

『きっかり二週間目に、その店は再開した。ライフライン回復のメドさえ満足にたっていない頃に、とびきり旨いジン&ソーダが、ドライマティーニが、マルガリータが、蘇っていたのである。常連たちは、いつもの一杯を飲むことで、内側から立ち直っていく。被害の大きさのわりには、ニュースにならなかった高級住宅地、芦屋ならではの、ライフライン。あの時、一体全体、どこから氷を手に入れたのか。いまだ謎なのだそう。無口な店主は、静かに微笑むだけ。店の名は、「ザ・バー」。最上級の、唯一絶対の、THEだ。常連たちは主張する。』

こういう原稿を書きました。これが大阪と私のご縁です。

私の仕事の中には、流通の仕事もあれば、学校その他宣伝の仕事があるのですけれども、今回、まちづくりセミナーですので、住宅とか、団地とか、そういうまちづくりに関してお話したいと思います。

皆さんの資料の中に「高見三条」というところがあります。高見三条という団地の仕事をしました。

北九州は1901年官営八幡製鉄所が北九州に来ました。今の新日鉄ですね。そのころは、そのころの所長というのは当時の市長より偉いというぐらいで、国の頭脳というかすばらしい人が集まって、国の威信をかけて、国を動かすようなプロジェクトで、八幡製鉄所ができました。彼らは来てたぶんどこに住もうかなと考えたのだと思います。彼らを選んだところは高見という土地でした。北九州には珍しく、南斜面の土地です。風水的にもとてもいいところ。たぶん1901年ごろの日本を代表する技師とか、そ

の人たちはずっと考えて、ここを自分たちの住まいにしようずっと考えて、そのいいところに、国のプロジェクトにしる、都落ちで、こんな九州くんだりまで来てという気持ちがあったのかどうかわかりませんが、その土地に彼らは桜を植えました。通りの名前も三条、四条、五条、六条と京風の名前にしました。街を造ったわけです。これはすごくヒエラルキーがはっきりしていて、所長のお家はすごく大きい大邸宅で、部長、課長、係長とあって、一般人の家と、すごい格子の形がはっきりしているような、けど昔造った建物であって、少し風情があって、それが、今はもうだめだと、新日鉄が人を引き上げて、住んでいる人がいなくなったんですね。そういうこともあって、地元周辺の市民が、花見に行くような桜だけは本当に立派で名所になっていたので、そこにみんな行っていましたが、新日鉄がここに新しく団地にしたいんだと、今ある社宅を全部壊して、ついてはそのコピーをとということだったんですが、最初にどんな住宅が建つのかお聞きしました。北九州のピバリーヒルズみたいなのができると、全然想像はできなかったのですが、土地の値段が高いですね。それで、造る家も北九州にしては広々とした家で、何億もするようなお家を一杯建てましょうと、そこは住宅地として非常にいいところなので、北九州市長の公邸があるようなところ。そこに連れて行かれ、行政より判子が一杯いるような新日鉄さんを相手に、とにかくなんかやるんだということで始まりました。

で、皆さんコピーライターというひらめきとか感性で、たぶん仕事をしているとか思われる方が多いと思うのですが、私はどちらかというたくさん資料を読み込んで、現場を何回も歩いて書くタイプのコピーライターです。なので、この団地も1901年からあったものですから、誰が住んでいたとか、そこに高見神社という守り神の宮司さんのお話を聞くとか、現場を歩いてみて、さすがに風水的に見ていいとか、いう感じの土地の力みたいなものがある感じで、ここはさすがにいい団地で、山を切り開いたり、海を埋め立てたりしたのでない土地ですね。そこを、何回も行ったたり来たりして考えて、で、住宅を壊すときに今咲いている名物というか、桜を全部切り倒すと聞いたので、喧嘩したんですけども、街が終わると共に今の桜には、なくなってもらって、今度新しい桜を植えることにしますということで、いろんな種類の桜が楽しめる街になっているんですけども、で、とにかく行ったときには桜が余りにきれいで、その後その桜を切られるということを知っていて、また、新しく桜を植えるということを知っていたので、100年前の人たちが、都から、遠く東京から、ドイツからかも知れないけれど来て、ふるさとの名

前になるように雅な名前をつけたの同時に、まず桜を植えたということを知りたいので、これは、やっぱり桜はずせんなあと、こういうコピーを作りました。売り出しは真夏だったんですけども、新聞を開くと満開の桜がカラーでドーンと載せることにしました。そして、普通の住宅の売出しではないようなコピーを乗せることにしました。

『まず、桜を植えよう、と先達は考えた。南向き。朝日から夕日まで、燦々と注ぐこの地に街を、と百年前の人々は考えた。道を拓き、家を建てた。京の都に倣って、三条の呼び名と桜の木を採り入れた。美しい街並みとなるように。街文化が育つように。まず、一本。そして、もう一本。家の数だけ、人の数だけ、桜は増え。春が巡る度、見事な花を咲かせ、生活を豊かに彩った。歳月は流れ、時代は変わり。人々は再び、この地に新しい街を、と考えた。21世紀のニュータウンを。現在の技術や機能を生かした街を。それでも、と人々は考えた。街の名前や豊かな自然、歴史や文化。先達の残した知恵と心は、受け継いでゆこうと。「百年目のニュータウン。高見三条」。1998年秋。新しい住人が、この地に再び、最初の本を植える。次の百年を桜と共に暮らす。街づくりがはじまる。』

というコピーを書きました。百年目のニュータウンというのが大きなヘッドラインとなり、普通の不動産広告とは言えない様なだらだらといろいろ書いてあったので、結構話題になり、北九州の中でもちょっとこだわりのある方々とか、お医者様方とかそういう方たちでコピーをじっくり読み込んだ方たちがお見えになられて、売れ行きはあっという間に売れました。ちなみにこれは、マスターアーキテクトは内井昭蔵さんです。

この後、高見シリーズは新聞で4本シリーズ有り、江川さんに褒められた2本目のコピーを紹介します。

『「そして、百年ぶりに、街は、耕され。」街は、いま、百年ぶりに、耕されている。新しい人々の手で。大きな機械の腕で。ざくざくと掻き回され、ゆさゆさと掘り起こされ。裸の土になった。更地となり。整地され。造成がすすむ。そのひとつひとつの工程を。この街は上機嫌で。全身に浴びる、陽を、雨を、風を。愉しんでいる。ゆるり見渡して。皿倉山板堰川高見神社。森木花鳥虫月星雲。慈しんでいる。そうして、耕され耕され。土深く、幾重にも積み重ねられた、地の記憶は、新しい時代の息吹と、混ざり合う。次の百年の街文化を育む、豊かな土台となる。「百年目のニュータウン。高見三条」1999年。街は、春を待つ。蒔かれるものは、11の通り、ふたつの公園、ひとつのせせらぎ、77の家。そして、500本の桜である。』

今は、大きなお家が建っていて、後、マンション

が建っています。そういう感じで、一大住宅地になっています。五条、七条と名前がついていて、真ん中に公園があって、ドンペリとか、フォアグラが普通においてある高級スーパーマーケットがあり、後が山で、くねくね入ると、向こう側が、美術館になっていき、高見神社があり、近くに音楽ホールがあり、環境も非常にいいところになっています。これが高見三条という大きな住宅地の仕事でした。

次のビデオに行きたいと思います。

~

ホテルの家、マンションのようでもある。ハイテクを備えたオフィスビルでも通用するだろう。台地から渦巻状に大空へと、地下1階地上14階、79.26mの高さと25,352㎡の広さを誇る北九州市立大学新館、全く新しい発想から生まれた学び舎である。校舎は長方形でなければならないということを決めたのか。四角四面の箱の中では、丸い知恵など育ちはしない。もっと自由にもっといろいろ感じて、考えて、学び舎としての存在から一歩踏み出し、カリキュラムに教えられる可能性、円形、扇形、四角形、三角形、自然形、幾何学模様の精神である。

新館の中の丸い形、ベンチや柵がされ、呼吸を愉しんでいる。太陽に向かうひまわりのようなパラボラアンテナには、世界各国から情報が集まる。レンズを通して知る社会はオリジナルな教材となる。

(中略)

迎える円、支える円、彩る円、安らぐ円、潤す円、教養と友情の輪を示すサインである。階段状に伸びた扇、最新鋭の視聴覚機器を用いて、講義が、講演会が、学会が、シンポジウムが開かれる。要の地と扇の先端では、目の高さが違っている。視野の広さが違う。物事を大きく捉える目とひとつにまとめる力が同時に養われる形である。風を感じる扇形、君たちは何になされるのか。大、中、小、様々な四角形、教室57、研究室100、情報処理センター8、厚生施設18、どの四角の中でもより柔軟な個性が発揮されるよう、天井には波、壁にはスリット、椅子にはユニークな表情、面白い仕掛けがあちこち見られる出会い。そうして、緩やかに重なりあった四角には、たくさんのシーンが詰まっている。明り取りの三角形、高い高い天井からはっきり降り注ぐ自然光、出会いを待つ、待ち合わせの場所、語らいの場所、ただぼんやりと過ごす場所、教科書だけじゃない、学ぶことの如何に多いことか、青春のテラススクランブル、贅沢な三角形である。

(後略)

~

これは、私の母校なんですけども、あるとき呼ばれて、新館の紹介ビデオのシナリオを書けと言われて

て、書いたものです。たぶん建築が早稲田大学の木原先生で、残念ながらそのときは建築家の人にお会いすることもかなわず、時間はなく、予算もないという中で呼ばれて行って、ああいう書類みたいなものと、とにかく現場を見なさい。といわれて作って、現場に行くと、一番最初に気づいたのが、タイトルにもなってます丸とか四角とか扇形とかの形にもすごく心引かれて、その建築家の先生がどの点に意図されたのか聞けばよかったんですが、ここから切り口を作っていこうと思いました。それによって本来建築家が意図してなかったものが見えるのではないかと思いました。

団地のコピーの仕事も書くし、建築のシナリオのコピーも書くんですが、今度の話は、福岡町というところの第4次総合計画の話が来ました。これは、建築をやっている方やまちづくりをやっている方、建築家であってかつコンサルをやっている方が興味のあることだと思います。

第4次福岡町総合計画策定ということで、皆さん知恵を出し合ってどういう風にしようかと、作ってたんだけど、その時の町長が、これは町民全員に読んでもらいたい。そのためには、もうちょっとコミュニケーションするとか、取っ付きやすいものにするために、入口に何か書いてもらいたい、というオファーがありました。先程、高見三条で一緒だった建築家と別のところで一緒だった建築家と相談されて、私は呼ばれて行きました。

で、この福岡町というのは、北九州の小倉と博多のちょっと博多寄りのところで、完全なベッドタウンですね。昔は漁業と農業の町で、鉄道が通ったために、団地がぽつぽつとできていった。それも30年代にできた団地と50年代にできた団地は位置が違うし、互いに交流は無い、しかも、もともと漁業や農業をしていた人こそ、ニュータウンの人たちとはまるで交流が無い。そういう微妙な街で、ただ海岸線はすばらしい海岸線で、川が流れていて、近くに宗像大社という非常に有名な大社がある。初詣とかわさわさ人が来る。そういうちょっと不思議な町で、私は全く行ったこともない、縁もゆかりも無い町に行って、第4次総合計画を渡されて、何か書けと言われてました。

これで、困ったことには困ったのですが、でどうしようかなと思ったのですが、困ったときの街歩きということになってます。もちろん先程も言いましたけど山ほど資料をもらいまして、もともと福岡という町がどういう町であったとか、どういう人たちが住んでいたかとか、どういう特産物があるかとか、そういう、資料を見るわけですけども、実際に困ると、現場、街歩きをします。で、行ったこともな

い町なので、最初は役所の人に、車で、バク〜と案内してもらって、で、じゃあと行って、次から一人で、歩いたわけですけども、たとえば2回目に行ったときは、旅人として、突然思い立ってこの町で、降りたことにしようと、自分で設定をしてその町を初めてきたような感じで、海まで行って、ぶらぶら歩いてみたり、旅人のような感じで町を見たりしました。2回目に行ったときは、どここの団地に友達がいると仮定しようと、その友達を訪ねることにしようということにしようと、駅に降りて、めったにこないバスに乗って、団地に行って、ピアノの音を聞いたり、生徒たちのわあわあ騒ぐ声を聞いたり、洗濯物を見たり、3回目に行ったときは、仮にこの町に暮らすことにしようと、不動産屋さんに行ってどれくらいの物件がどれくらい出ているか、スーパーマーケットに行って、お魚はどの感じで売られているか、何々が安いとか、で、歩いて回りました。でもそういう時はすごく寒いときだったんですけども、あちこちでうろうろしてたんですけども、第4次総合計画にコピーをどうやってつけばいいんだよって感じでだんだん寂しくなっていって、もう書けないかもしれないという感じで、で、バスが1時間に1本ぐらいしか来なかったりするので、待ってるより歩いた方がいいやと思って、歩いているうちに、トイレも、喫茶店も無いと思って、そんな悲しい思いをして、だめかもなあと思いながら、役場の近くの図書館に行きました。そこにトイレを借りるためですけども、で、図書館によって、ちょっと待合室のようなところで、途方にくれていたんですね。それで、さすがに書けんかしらんと思って、もう全然知っている人も誰もいないし、どうしようかと思って座っていました。そしたらそこに中年のご婦人がちょっと遅れていらして、彼女は明らかに知的障害のある感じの人でした。たぶん図書館でそういう人たちの何かがやられていてお迎えを待つ間、いつもそこで待っているんだと思います。あんまりじろじろ見たら失礼かなと思って、へとへとで気持ちもなえてたので座っていたんですが、彼女が私の方をじ〜と見て、あーなんかじっと見られてるなあと思ったら、次の瞬間彼女が私に向かって大きな声で、ふるさとを歌ってくれました。これは鳥肌ものでした。いきなり私だけしかいないのに、私に向かってふるさとを歌ってくれて、そのとき、私は書けるなと思った。それで、いきなり全然知らないような町が、やさしくしてくれたような感じで、それから、またせっせと町歩きを続けて、そしたら、今までと違って海とか、すごい、あの〜、いいじゃんみたいな感じで、毎日4時になったら何かが飛んでくるとか、近くに馬場があったりして、突然馬が、出てきたりとか、川もきれいじゃんとかだんだん思っ

てきて、で、ようやくそんな苦しみの中で、で、こういうコピーが書けました。

『めざめる町。福岡。ベッドタウンから>>リビングタウンへ 確かに。我々は眠っていたのだった。ベッドタウンという、心地よい響きの中で。通勤し、通学し。そして、ただ戻っては休息した。町は静かに、待っていた。友よ。憶えているか。親父のそのまた親父たちの、日焼けした笑い顔を。漁に出、畑を耕し。生き生きとした、お袋の背中を。よく動く指先を。あるいは、友よ。憶えているか。初めて、この町に降り立った日のことを。ああ、ここに家を建て暮らそうと、決めた、あの日の空を。子どもたちよ。この町に生まれ育ち行く、生命よ。きみたちは、この町が好きだろうか。いつもの坂道、並木道。改札口から海への道。川沿いの散歩道。境内。バス停。広場。図書館。国道。あの角の店。算数のテスト。遠足の前夜。先生。黒板。野球。ホームニカ。校庭。絵の具。初恋。いつか、羽ばたく時がきても。駆け回った、この町のひとつひとつが。きみの支えとなるだろうか。胸に熱く生きるだろうか。森よ。川よ。海よ。見守ってくれるものたちよ。深く根を張り。豊かに流れ。優しく打ち寄せ。美しさを失わないでいるか。夢は涸れてはいないか。嘴、背びれ、尾、翼、光る眼差し、甘い鳴き声。町の小さな住人たちよ。きみたちは、幸せだろうか。我々は、めざめよう。こんなにも素晴らしい毎日に。愛するものたちと、未来を生きるために。起きあがり、歩きはじめる。ベッドタウンから、リビングタウンへ。そして、生み育て学び語り働き伝え守り集い結び笑いあって、暮らそう。わが町。福岡とともに。』

という長々としたコピーとなりました。で、ベッドタウンだったので、ベッドタウンから、リビングタウンへ、で、めざめる町という、総合計画の中には子供たちの教育の話とかもこの町で暮らそうという、単にベッドタウンで寝るだけの町ではないと。これはそのときは福岡町だったんで、3万人の住人がいたんですけど、配られて、みんな総合計画を読みました。みなさん意識を持ってこれからの町を、総合計画でもって変わって行くと認識を得たと思います。で、結局福岡の町の人とは、最初全然知らない人たちだはどうしようかと思ったんですが、こういうことでつながっていくうちに、仲良くなってですね。この後福岡町の町誌かな？五十周年の記念誌みたいなことも、書きました。それは「福が住む町」というタイトルで、福岡の写真集みたいにしたんですけども、それをやりました。

それで、一昨年福岡は、平成の大合併で隣の如月町となって福岡市となって、その市長選でも裏方となって、キャンペーンもしました。今でも、彼らたちと彼女たちとお付き合いがあって、あれだけそ

よそしくて冷たかったけど、今は福岡にちょっとよってみようかねと思うし、そこで知り合った女性の行政ウーマンですけどね。そのとき町史とかやっていたとき、キルギルとかチャイニーズ・エンジェルのリバイバル版が流行っていたので、その女性のことをふくま〜ず・エンジェルと呼んでたんですけど。50代、40代、30代の秘書室とか、広報とか、行政の女の子ですけども、時々彼女たちもくたびれたねと思ったら北九州に来たりして、泊まったりして、わあわあ騒いだりしています。

また、ビデオに行きます。

~

まちは拓かれている。ひと目で心でわかる。このまちこそ、海峡のまちなんだ。眼前を大中小、国籍も様々な船が、一日700隻も行き交う。時折の汽笛、鉄道の町なんだ。茶銀白、旅客貨物上下500本の列車が、走る、停まる。キラキラとガラスの駅舎、ビールの町だった。大正2年に建てられたレンガの工場倉庫、ホップの芳香が立ち込めていた。歴史の町なんだ。往還、参勤交代、馬で運ぶ、宿場はにぎわった。対岸のタワー、海を渡る1,068mの関門橋、夏の夜の13,000発の花火が夜空に舞う、懐に小さな漁港、その守り神。背後には、戸上山企救山塊、風の通り道、遠く煙突に日が沈む、ルート199は眠らない。この町は開かれている。東へ西へ、7つの海、遥かな山へ、本州へ、大陸へ、朝昼夜、四つの季節が、過去への、古の物語として、やがて未来が、ついに僕らに、北九州市門司区大里。22.1haの1,200人が降り立つことになる。旅人が、新しい住人が、まちを構成する。戸建て、中高層住宅、商業と文化施設、すなわち緑あふれる町角、个性的な家並み、楽しい歩道、海公園、洗練された店舗、地産マーケット、美味レストラン、ピアミュージアム、幸せの鐘、こうして僕らのハッピーエンドは始まった。

本町地区は、都心小倉と観光の拠点門司港レトロ口地区との中間地点に位置し、古くは江戸時代に九州と本州を結ぶ海峡、門司洋館の前の宿場町として栄え、昭和17年には、関門トンネル開通により、門司駅が本州と鉄道で結ばれ、九州の玄関口として、門司の知名度が上がりました。このような交通の利便性や地理的優位性により、当地区はサッポロビール九州工場を創業の地として、更に他工場や鉄道など産業の場として、八十数年間、重要な役割を果たしてきました。しかしながら、平成8年には、ビール工場の移転計画が発表されたのを機に、跡地の利用が、大きな課題となりました。そこで、地元有志による真剣な論議を経て、平成9年には地権者による大里本町地区まちづくり勉強会を開催し、平成11

年には、北九州市大里本町地区土地区画整理組合設立準備会が開催されました。

そして、翌年には、平成12年の5月には、北九州市長より、組合設立認可を受けました。こうして、隣接する旧国鉄清算事業団用地などの未利用地を含めて、区画整理事業が開始されました。事業にあたっては地域に秘められた特性を最大限活かしながら、食、住、遊を愉しむ、地域の中心核として役割を担う地区、そして、整備を進めてきました。新しくなった門司駅南口地区は、門司駅南北公共連絡通路、北口駅前線、大里本町通り線、国道199号線の付け替え直線化、大里本町土地区画整理事業、古きよきものを伝える、新たな活力が、関門海峡の優れた景観と、門司駅を含む利便性を活かした、商業アミューズメント、住宅及びウォーターフロントの公益施設も完成し、わたせせいぞうさんがさわやかに、明るく栄華のまちを目指し、食、遊、住の3つの様々な機能を融合させた、新たな息吹を喜ぶまちとして、今後も更なる発展を遂げていくでしょう。

~

これは、この前の竣工式の記念のビデオで、最初のコピーは私が書いてますから、全体的に、書いたものではありませんので、今まだ、続いているプロジェクトということで、門司の大里地区というのをご紹介したいと思います。

ここはサッポロビールの工場跡地でした。工場が撤退することになって、撤退するときにはたいがい地元の方は、出て行かないでくれ~と、一生懸命運動したんですけれども、北の方に観光ビール園みたいなものも造って、土地も安かったんでしょう、イメージも良かったんでしょう。そこに、お客さんが見えてということになってます。このときに、私は、反対した一人として、パネルディスカッションに出たりして、あるいは最後には、恵比寿ガーデンプレイスと札幌ビールの本社に行って、社長に直訴まで行ったんですけど、だめでした。

そのときから因縁があるところに、コピーをして参加してくれと言われ、これはなかなか縁があったんだなと思いましたけれども、このことは今日売って貰っている私の本の中にありますが、こういう原稿を書いています。

『小倉から門司港へ向かうルート199、海岸沿いのドライブコースである。この国道に面して赤レンガ造りでレトロでおしゃれな工場がある。プーンとあたり一面ホップの輝かしい香りがする。サッポロビール九州工場である。子供の頃、我が家ではサッポロしか飲まなかった。ビールと言えばサッポロだったのである。サッポロでしか取れなくて、わざわざ九州まで運んで来るのだ。子供には飲ませられないくらい貴重なのだと信じていた。ビールには他に

も銘柄があることを、輸入ビールだってあることを、サッポロの工場が地元にあることを、大人たちが地元のビールであるからこそ、好んで飲んでいてを知ったのはずいぶん大きくなってからだ。今回の工場移転の話、あの人たちはどんな気持ちで聞いたのだろう。黙って飲んだるばかりが男やないけね。ここぞと言うときにはがつつと一発くらわさな。何かせんでいいと。工場がなくなるちいよるんよ。工場なくなるんよ。』

という原稿を書いています。それから工場がなくなって、しばらくは、主がいなくなった建物が建っていたんですが、いよいよこういう風な形で、まちを造るということで、事業が始まりました。その中で、倉庫とかはもちろん崩したんですけども、大正2年に建てられた防災レンガで造った非常に貴重な造れないよと言えるものは残して、ミュージアムにしようとか、醸造の工場ですが、今中が危なくて使えないですが、その外壁のレンガが非常にいいということで、それは残そうという形でまちづくりが進んでいます。

これは非常に特徴的だったのは、わたせせいぞうさんをイメージプロデューサーにしたことですね。わたせさんは生まれは違うんですけども、小学校から高校卒業するまで北九州の門司にいらして、大学は早稲田に行って、それからお勤めになって、イラストレーターとしてデビューして、ハートカクテルで一世を風靡して、活躍している方なんですけど、61歳かな、この人をイメージプロデューサーにすることが決まっていた。皆さんご記憶にあるかもしれませんが、ちょうどその頃に、福岡のアイランドシティというところがあって、人工島で、あそこを開発するのに、「ととろ」の宮崎駿さんをプロデューサーにもってこようと、決まりかけたんですけど、だめになった経緯がありました。そのイメージがあって、時を同じくして、わたせさんをイメージプロデューサーにして、ここを開発することになりました。個人的に思ったことは、地元で生まれ育って、地元で地道に仕事をしているわけですね。そういうときに地元出身者で、東京なりで成功して、ポンと出た人と呼んで来て、何かさせたいと言う行政の思惑もあって、そういうものかよと思った記憶があります。北九州では、漫画家では銀河鉄道999の松本零士、最近の若い演劇の方では松尾スズキとか、割とそういう人に何かとお願いしがちな、行政がそういう人をひばって来ると、何か全てのことがオールOKになってしまうような雰囲気があったので、わたせさんがイメージプロデューサーでいったいどうすればいいんだという課題を与えられて、うっと惚ったような記憶があります。

で、このまちを造るのに、デベロッパーとかいる

いる入っていてややこしいところだったんですけども、土地だけは素晴らしいですね。おそらく北九州の現在ある住宅地の中では、高見と大里が、2大素晴らしい土地という感じで思っています。そこに関わるのは非常に素敵なことだったんですけども、とにかく海が真ん前なんですね。しかも、海峡なんですよ。だから、流れが非常に速くて、目の高さで船が一日何百隻も通っているんです。一日そこにも全く飽きませんね。門司港というのは鉄道の終着駅なので、電車がいっぱい通っているわけですね。上り下り一日しょっちゅう通っている。で、後ろには企救山塊といって素晴らしい山々があって、前はルート199ですから、鉄道と道路と船と山があり、海がありみたいなことで、で、平地なわけです。サッポロビール工場として、パアッと一気に売り出そうということだったんです。そういうところで、土地だけは本当に素晴らしいので、何とかしなくちゃねと。で、サッポロビールがいなくなってしまったときの気持ちとか因縁もあったので、その後、こんな素晴らしい住宅地になったんだと、思って参加したわけです。組合の人たちも考えたもので、わたせせいぞうさんが名前を出すプロデューサーと知ったんですけど、わたせさんは東京にいらっしゃるわけですね。で、高校卒業されてから故郷を離れていらっしゃるので、地元のことはそれほど詳しくないだろうということ、50代、40代、30代、20代の女性を集めて、Wの会というのを発足させました。わたせさんとウーマンのWと言う意味だったと思うのですが、地元のそれぞれの年代の女性とわたせさんとのつなぎ役になって、意見を言ってくださいということで、私も、40代ということでそこに入ったわけです。それで、私は本業がコピーライターなので、まちのコピーを書いてください。と言う風に言われました。

ここで、他のプロジェクトとすごく大きく違ったのは、大里は「大きい里」と書いて大里と読みますけれども、「内の裏」と書く内裏も引っ掛けてあって、平家の落人伝説のあるところなんです。後ろの神社にもそういう伝説があって、そういう人があがって行って逃げ込みましたとか、しかも、参勤交代で使っていた道なんかがあって、非常に由緒正しき昔からの街道沿いで、宿場があったり、馬を交換したりしたよという碑が立っていたりで、独特の土地です。そういうのがサーとあって、その土地も立ってみると、何かしら魅力のある土地で、とにかく土地の真ん中に立つと、車が行って、船が行って、電車が行って、風が吹いて、煙突があって、みたいな。で、向こうには関門橋という大きな橋があるわけですね。で、この歴史とこの土地が本来持っているものと交通の要衝みたいなものを何とかしなければ、という

ふう思ったわけですね。わたせせいぞうさんが書いたイメージプロデュースのああいうさわやかなハートカクテルみたいなイメージと大里のまち本来が持っているようなものをどうリンクさせればいいのか、それが非常な宿題となりました。

わたせさんの絵のようなまちができればいいんですけども、ああいう感じだけでもなくて、このまちだけみたいなもの、それでまあ、今回は、私のコピーを読んでもらってわかると思うんですけども、私のコピーは非常に色の濃いコピーライターです。個性が強いコピーライターといってもいいですが、私のコピーを見慣れている人は、石丸というのが判で押してあるみたいな、非常に強い主張のあるコピーなんですけれども、今回はイメージプロデューサーがわたせさんで、全国ネットで、ハートカクテルで、みんなが認知している人が来るので、この人に付けるコピーに関して今まで通りでは絶対だめですね。なので、今回は徹底的に黒子に徹しようという風に思いました。

そして、大里本来のまちとつなげなければならないので、彼の絵がイメージで行ってますので、若い男女がいたり、ちょっとニースか、ロサンゼルスか、何かあっちの方の町のような雰囲気もありながら、この大里に根付かせるために、どうしたらいいんだろうということ、私はとにかく今回は、完全に事実だけを並べることにしました。まるでデータのようなコピーになったんですけども、それが絵もイメージでコピーもイメージだったら、それはいったい何なのと言うことになってしまうので、で、このコピーを果たしてわたせさんのイラストに取り付けてどんなもんだらうかという話もあったんですけど、そこはお願いして、やることにしました。これがビデオで最初に流れたコピーですね。

『「まちは、開かれている。」一目で僕らの町とわかった。海峡の町なのだ。眼前を大中小。国籍も様々な船が。一日700隻も行き交う。時折の汽笛。鉄道の町なのだ。茶銀白。旅客貨物上下500本の列車が。走る停まる。キラキラとガラスの駅舎。ビールの町だった。大正2年に建てられた煉瓦の工場倉庫。ホップの芳香がたちこめていた。歴史の町なのだった。往還。参勤交代。馬と駕籠。宿場は賑わった。対岸のタワー。海を渡る1,068mの関門橋。夏の夜を、13,000発の花火が彩る。懐に小さな漁港、その守り神。背後には戸上山企救山塊。風の通り道。遠く煙突に日が沈む。ルート199は眠らない。このまちは、開かれている。東へ西へ。7つの海。遥かな山へ。本州へ大陸へ。朝昼夜。4つの季節へ。過去へ古の物語へ。やがて未来へ。ついに僕らに。北九州市門司区大里。22.1haに1,200人が、降り立つことになる。旅人の新しい住人となって、まちを興すのだ。

戸建て、中高層住宅、商業&文化施設。すなわち、緑溢れる町角、個性的な家並み、楽しい歩道、海公園、洗練された店舗、地産マーケット、美味レストラン、ピアミュージアム、幸せの鐘。2004年春こうして僕らのハッピーエンドは始まった。』

というコピーで、ほとんどデータのようなコピーです。これが、わたせさんの4つの絵の横に載ってまちづくりが始まっています。ただ非常に残念なことに高見三条のときは、マスターアーキテクトが内井昭蔵さんとかがいらしたんですけど、この町では、イメージプロデューサーはいたし、コピーライターとか、女性のまちづくりの意見を言う人はいたことはいったんですが、建築に関するマスターアーキテクトという人はいなくて、わたせせいぞろプロデュースで始まった段階で、かなりのハウスメーカーが、入っていたので、個性的な家並みというのがちょっとはできていますが、何だ結局ハウスメーカーかという感じがするのが非常にもったいなく、それで喧嘩もしてみたんですけどだめでした。中高層住宅で、マンションの絵もあったんですけども、普通のマンションが建ってしまって、ここの社長と私は喧嘩したんですけど、だめでしたね。

このまちは本当にもっと素晴らしいことになっていたのに、いつの段階か、どういう風に関わるかによって、せっかくのいい土地が、という後悔はまだあります。大正年間に出てきた本物の建物ですね。本物の煉瓦の倉庫を再利用してみたりとか、あるいは700もの船が行き交って、本物の海峡があったりとか、そういういろいろなものがあるために、かなり救われてはいますが、非常に残念な感じはしています。それは、わたせさんも感じていると思います。彼は覗きにくるたびに、緑豊かなまちとはいいいながらまだ緑はできてないのに、花の種を持ってきて、パッと蒔いていつか芽が出るんじゃないかとひそかにやってみました。

ホントだったら彼のイメージするものを形にするアーキテクトというか、まちづくりの人がいたらよかったですけど、いなかったのか。もうかなり進んだ段階で、あれこれ手を打ってみたけど、どうしようもなくなって最終的にわたせさんに声を掛けた段階では、どうしていたのか知りませんが、ただマンションに関してはまだ余地があったのに、という感じがまだあります。大きなマンションが建つ可能性があるので、この辺に賭けるしかないかな、そこはうまく具合に建ったらいいなと、思ったりして、すごく本当にいい場所で、ここはマーケットは基本的には、北九州市以外の住み替えがなくって、対岸の下関とか、もっといいところに売れて、東京や大阪からのターン組みとか、或いはアジアの人たちも住んでもいいような、海とか船とか好きだよとい

う人とか、歴史のある何かのまちが好きな人とか、でも、わたせせいぞろのコアなファンの人とかは、住んでいただけるといいと思います。それがこんな感じのまちです。

では、今後どうなるのか、関わり方が今微妙な段階に掛かりつつある。今ここのまちをやっているところです。私は最初はいやだなと思ったわたせさんと、妙に仲良くなってしまって、それで、再び宣伝しますが、私のはじめての本に、わたせさんが帯を書いてくれました。

コピーを書くことと建築をすることは似ているような感じもします。建築家の方やまちづくりをする専門家の方が、どういう風にこのまちをするのか、もちろんクライアントの依頼もあるでしょうから、まちの地形であるとか、周辺のこととか見て、まちをデザインをするのでしょ。改定のこととも考えたり、今なら環境を考えるのか、誰もがいけるような感じで、障害者でも、お年寄りでも住めるような、子供に優しいものにするのか、そういうのによって建築をなさると思うのですが、コピーで参加するのはそこにある種の色づけ、生活臭、見たいなものです。ね、歴史的なものであるとか、もともとそこにあったもの、住んでる人とか、特産物はなんだろうとか、食べられているものはなんだろうとか、というのを観察して、まちづくりやつくっているものに、肉付けをするというか、多少そういうことをしています。で、うまくいけば、合体して分かり合えるし、うまくいかないとか罵り合って、分かり合えないこともあります。今のところは取りあえずやったものが、まあまあぼちぼちうまくいってます。今の大きさがどうなるかは心配で、だれか責任もってやってくれる人が見つからないかと多少思っています。

これからのまちづくりというのは、コピーを書くだけではなくて、そのまちがいったいどうなるのかというのは、コピーライターの仕事というのは、3ヶ月や半年のスパンなんです。まちに関していえば、できるまでに何年もかかって、その後どうなっていくのか、気にしないといけない。これはなかなか本業とは違うエネルギーを使うなあと、私としては勉強になっています。で、巨過市場の件で鳴海先生とお知り合いになって、江川さんとお知り合いになって、関西のことを知るようになって、いろいろ勉強になっています。

(注. ~ (ビデオ)のコピーは略記しています。)